

# 新潮

信  
用  
保  
証  
会  
社

震災から一年

大  
破  
船

リーダーなど  
いらない市

日本大震  
再生への处方箋  
技术健一郎

昭和57年5月4日  
第三回郵便物認可  
平成24年3月10日発行  
(毎月16日発行)  
(2月18日発売)  
第11巻3号  
(通巻35号)

3

特集

金融のボウズ。ガント

原発思想地図

武田徹監修

女系天皇を画策する奸臣

竹田恒泰

民主党は年金に  
指一本触れるな

太田啓之ほか

# 震災から一年停滯をぶち破れ

## 「起業の町」 陸前高田を作る

1973年陸前高田生まれ。高校卒業後進学し、レッドロックスコミュニケーション・カレッジ（コロナド）卒業。若手観光ホテル勤務などを経て、八木澤商店に入社。昨年4月に社長に就任する。なつかしい未来創造株式会社の専務でもある。



被災地の中でも甚大な被害を受けた岩手県陸前高田市。町を歩けば、瓦礫こそなくなつたものの、いまも荒涼たる風景が広がり、復興は程遠いように見える。だが町作りは着実に進んでいた。新しい産業の種が次々蒔かれているのだ。それも若者たちを全国から集めて。中心にいるのは、地元老舗の若社長だった。

陸前高田市は津波で壊滅しました。死者・行方不明者は、二〇〇〇人近くに上ります。市役所も流され、臨時職員の方も含めると、その四分の一、一〇〇名以上の方が亡くなつた。二〇〇年以上にわた

ている人がどれだけいるのか情報収集して、必要なものを運びました。

震災後、初めて全社員に集まつてもらったのは、四月一日。この時、先代の社長が遅れていた二月分の給料を渡しました。先代はそれが最後の仕事で、それから私は社長を引き継いだ。この時、救援物資の配達、遺体の捜索、瓦礫撤去など、すべて会社の事業として認めて賃金を支払いますという話をした。そして無理をしなくていい。出られるようになつたら徐々に出てきてほしいと。それから少しずつ、会社の再建が始まりました。営業所をどうするかなど、三月中から動いてはいたのですが、五月になつて陸前高田から内陸に一時間ほど行った一閑に仮営業所を構えました。でも経営方針は一八〇度変えなくてはならなかつた。

八木澤商店の基本方針は、地産地消です。その地域で取れたものを地域の中で消費していく。その中で食育もやりながら、地域のブランド化もする。でも白分たちで作ることもできなければ、地元で売ることもできなくなつてしまつた。そ

つて陸前高田市で醸造業を営んできた八木澤商店も、社屋から工場まですべて流れ、社員も一人亡くなっています。

けれどもいま、この町は復興に向けて着実に歩み出している。地元高校の新卒求人倍率は、震災前に比べて一・七倍。失業率も四パーセントです。当社でも昨春は一人、今春は二人を採用している。

まあ、会社自体は債務超過なんですが。

また、地元の経営者団体である中小企業家同友会の仲間で廃業したのは一社のみ。同友会は、地域で一社も仲間の会社を倒産させない、そして一人でも多くの若者の雇用を生み出せる会社になつてい

うなると、他で作つてもらつて、外で稼ぐしかない。

それで思い切つてOEM（相手先ブランド名製造）をすることにしたんです。秋田の醸造メーカーなどにレシピを公開し、しょうゆなどの商品を作つてもらつてそれを売る。七月までは、作つていたいたい商品に、法律で定められた最低限の表示だけを記したラベルを貼り出荷していました。製造をやつていた社員は車で、東京や名古屋、大阪方面へ営業を行つてもらつた。

もちろんその一方で、工場再建を目指し準備をしてきた。そしてようやく一〇月にこれも一関に工場を借りて、つゆ・たれ類の製造を再開しました。三月には、しようゆ工場建設を取り掛かります。

### ボランティアなんかで来るな

ここまで來るのには、さまざま支援や得がたい多くの出会いがありました。いま工場建設を二つ同時進行で進めていますが、これはファンで集めたお金が元手になっている。ミュージックセキュ

く、というのが基本的な考え方でしたから、それが恆久実現できたかっこうです。

会社を潰す気はまったくありませんでしたし、初めから雇用も守っていくつもりでした。すべてが流された三月一日以降は、社員をちと救援物資を配つてきました。市の機能が失われ、緊急物資の対応は自衛隊に任せつづりだつたんですが、私たちのところにも、全国の経営者仲間から日本海経由で次々救援物資が届けられてきた。当時は、避難所だけではなく、民家で五〇人、六〇人が寝泊りしているところもざらでしたから、そこに物資を届けながら、どこでどのように困っ

リティーズという会社が作ったセキュリテイズファンド一です。一四〇

万円で、半分が出資金、半分が応援金（寄付金）となるものなんですが、昨年つゆ・たれ工場の建設で五〇〇〇万円を集め、いましょうゆ工場の費用としてさらに一億円を募集中のところです。

このファンデンドは宮城県亘居の山田康人さんがから教えられたものでした。最初に電話がきたのはまだ三月のこと。ファンドと言えば、ハゲタカが思ひ浮かび、最初は何のことかわからなかつた。でも山田さんの紹介なら、と四月に会つて聞いてみると、ハゲタカではないし、趣旨もよくわかつた。それですぐに申し込みました。ほんとに助かりました。

ただその頃は、会社がどうなるか分からなかつた。ファンドをお願いすることになつて、社員にも、雇用を維持して走り続けるとは言つてきただけれど、いつ米櫃が空になるかわからない。薄水の上を社員三十人三一脚で全力疾走するといふことでいくが、氷が割れたら、ロープでつながつたみんなが助からない。それ

ではダメだ。だから自分たちが経営感覚を持つようにしてほしい」と話し、その教育訓練もしました。その時に若い社員がひとり、「八木澤商店がなくなるというビジョンは描かないけれど、社長がいなくてもつぶれない会社にする」と言つてくれたのはすごく嬉しかったですね。

そういう混沌とした中で六月には、インターネット・シップ（就業体験）の学生たちが送り込まれてきた。会社でボランティアをしてくれる。でも企画したソシオエンジン・アソシエイツの方からの説明を聞いていたら、本来の趣旨は起業家を育成することだ、とボロっと漏らされた。あつ、起業家育成なんだ、それ、やりたかった。起業と聞いたり、以前それしか耳に入らなくなってしまったんですね。このインターネット・シップはもともと内閣府のプログラムで、社会的な問題を解決するような企業家を育成することが本来の趣旨のひとつ、ということでした。そうなると、もうボランティアなんかで来るな、起業しろって、学生に言つていた。

(起業支援) カンパニーを作ることにもなつた。「なつかしい未来創造株式会社」といいます。ソシオ・エンジンさんは、教育事業の傍ら、ソーシャルビジネスネットワーク大学の事務局もやっている。そこには社会的な課題に取り組む会社が多く入っていて、それらの会社の方が次々いらして、これから陸前高田について侃々諤々議論を交わした。

「なつかしい未来」は、起業支援と、街づくりをする会社です。それも「新しい公共」というスタンスで作っていく。

「新しい公共」とは何か。行政に産業再生ができるわけではありません。でもいろんな制度、法律は行政が管轄している。さまざまな規制があつて起業できなかつたり、事業が生み出せなかつたりするのによくある話で、「新しい公共」はその規制の壁を取り払つて新しく調整していく、という発想です。

陸前高田は全部なくなつてしまつた。いま建設の特需で潤うところはあつても、主産業は壊滅した。そもそも震災の前から商店街はシャツターハウスになつていて、

当時、危機的状況だと思つていたのは、来春の高校三年生に行き場がないという事でした。急いで地元に就職先を作らなければいけないと切実に考えていました。地元にも、いまの三年生にこの町は会社も仕事もなくなつたのであきらめて外に行きましたようという進路指導だけはしてくるな、と話していましたね。その後も、いま地元の中小企業の仲間で必死に受け皿を作るから、と。

六月からインターネットがはじまって、陸前高田と気仙沼に二回二週間で二〇名くらいがやってきました。それが四回。私たちはここに来る学生には初めから「八木澤に来るなら起業しろ」と言っておいて、「一年以内に起業する事業のビジョン」を作らせた。僕の話し方がけつこうキツいので、最初から当社に来る学生は少なかつたんですが。

昼間は社員と車でお客さんのところを回つて仕事をしてもらい、プランは夜、寝ないで考えてもらつた。それで一週間

産業基盤は非常に脆弱でした。だからいざれもつと継続的な、持続可能な社会をどう生み出すかが課題になつてくる。だからいまのうちに種を蒔く。僕は、陸前高田を起業家が一番多く生まれる町にしていくたい。起業の町、陸前高田を作りたい。何もなくなつた町だから何でもできる、というのは乱暴かも知れないけれど、何もなくなつたから「新しい公共」も取り入れられるのではないか。

どこかなつかしい、日本人の本質的な美学に根ざしたもの、侘びさびではないけれど、自然との調和の中で、質素だけど質の高い、ちょっとだけ不便だけど持続可能ななつかしい未来を私たち作つていきたい。情熱的な起業したい若い人たちが集つてきて、ほら、こんなものまでできているよ、と町の人たちに安心感を与えたい。そういう社会なら、孫に託して安心だな、とお年寄りも思えるでしょうし、ここに住みたくなる人も増えてくるでしょう。

もう起業への動きは始まっています。グリーンツーリズムもそうですが、な

後に持つてきた事業計画書をこちらがバサッと切るんですね。そうすると「失つてみんなで悩む。考え直す。このプランとこれをくつつけられないとか、新しいことを考えたり、お互いの事業を点検したりして、また計画を持つてくる。そこから実現しそうなものも出てきました。広島大学の大学院生がグリーンツーリズムをやりたいと言つてきた。都市的人が田舎に長期滞在して農業体験などをしながら休日を過ごすというのを陸前高田でやる。これは今年の四月一日を目指してやつてきましたが、ここに来てちょっと遅れそうです。

他にも高知の黒潮町にある砂浜美術館を参考に、陸前高田の砂浜自体をミュー・ジアムにして、Tシャツを作つて、というアイデアもある。これをグリーンツーリズム事業に組み合わせたり、別に出ているカーシェアリングを組み合わせたりと、いろいろプランが広がつている。

その一方、学生を送り込んでくるソシオ・エンジン・アソシエイツの方々とお話をしているうち、インキュベーション

つかしい未来」でも、例えば、地元の仙杉を使って家具を作ろうというプランがきています。端材を利用して釘や螺旋子を作つていく。いま木材自体は復興で需要がありますが、問題は間伐材で、その活用が大きな課題となつていて。だから問題解決型の事業として、これを起業させる意味がある。

もちろん起業すればいいという話ではありません。その事業性をきちんとチェックしていかないといけない。事業を継続して社会的な課題を克服することが目的なので、それを支援する体制をどう作るか。ファンドも入れるし民間の支援も受けるし、行政も入れる。国の予算がつくのを待つてたり、補助金とか生活保護を受けることをあてにしていたら、破綻します。棚からぼた餅は落ちてこない、棚にぼた餅があつたら、手を伸ばして取つて食べて、別のぼた餅を置いてくる。そうやって持続可能な社会を作つていきたい。陸前高田はその取り組みの最中にあります。